東洋學叢編 第一冊

大阪靜安學社編

昭和九年

東京刀江書院刊

「至元譯語」に就いて

石田幹之助

一

宋元から明にかけて幾度か刊行された類書「事林廣記」の或種の版本には「至元譯語」といふ漢語と蒙古語との對譯語彙が載つてゐる。これは此種の語彙としては最も古いもの丶一であつて、其後に編纂された明の洪武年間の「華夷譯語」以下、多くの漢蒙乃至蒙漢對譯辭彙の先驅をなすものではないかと思はれる。極めて些々たるものではあるが、此の意味に於いて相當我等の興味を惹くものがあるに拘はらず、此の語彙は久しく學徒の注目を贏ち得ずにゐた歟に考へる。抑丶此の小辭彙が始めて我が學界に紹介されたのは大正十一年十一月十一、十二の兩日、大阪外國語學校の蒙古語部展覽會に於いてこれが展觀に供せられ、その謄寫版刷の目錄に載せられて一部の人々に傳へられたのが最初ではないかと思はれる。近代支那の學者が此の語彙に就いて殆ど知る所のなかつたのは、後に稍丶詳しく述べる通り、之を載せた「事林廣記」其物の傳本が非常に少く、從つて之を目睹した人の稀有であ

つたことに因るものと認められる。私は蒙古語に甚だ暗く、斯かる資料を檢討論究する資格を持たぬものであるが、埋れてゐたかの觀がある材料を紹介し、專門の士の十分なる研究を待たんが爲にその體樣の一斑を略述し、併せて語彙の全部を逐錄して世に貽ることゝする。固より甚だ不得意の方面に手を著けたことであり、且つ取急いで稿を纏めなければならなかつた關係上、誤謬遺漏も隨分多いことゝ思はれる。此點は深く大方の諒恕を乞ふと共に又十分なる叱正を仰がんと欲する所である。

二

先づこの語彙を載せた「事林廣記」に就いて一言することゝしたい。此書は宋元間の人陳元靚の編に係るものであるが久しく支那に迹を絕ち、その今に存するもの極めて稀であることは神田喜一郎・長澤規矩也兩學士の所見に徵しても知ることが出來る。(1) 卽ち兩學士の如き漢土典籍の存亡に精通せられる士さへ殆ど之を佚書に近しと考へられ、纔に北平故宮圖書館に元刊本一部を存すと稱してをられる。四庫の總目を檢するに著錄を經たるものゝ內に此書なく、存目の內にも亦之を見ない。阮氏の宋收書目にも之を揭げず、明淸諸家の藏書目亦多く之を收めざるが如くに思はれる。(2) 然るに我國には世間周知の如く幸に此書を傳へ、而もそれが一種に止らず、現に少くも至元刊本、元刊別本、明刊本等が傳はつてをり、和刻本さへ作られてこれは相當廣く世に行はれてゐるといふやうな次第である。然

しこれらの諸本はいづれも體裁、内容とも多少の出入があり、後出のものは皆前出のものに增損を施してあり、原本のまゝのものはない。陸心源の如きは原本は宋末の刊行に係り、元刊明刊に見ゆる元代乃至明代の事を記せる條はすべて別人の增入であつて陳氏の預り知らぬ所であると考へてゐるが、[3] 元初の增添まで他人の手に成るか否かは遽に定め難いとしても、ともかく後刻のもの程後人の手で增減の加へられてゐることは問題がない。そこで版本によつてはこゝに論ずる「至元譯語」を載せてゐるものと然らざるものとがあり、亦之を載するものも題して「蒙古譯語」と稱するものがあり、各〻一定してゐない。依つて次に先づ私の知る所の諸本を列擧してそのいづれの本にこの語彙が存するか否かを明かにし、次いでその一つに準據して内容を紹介しようと思ふ。

三

今我國に存する支那で刊行された「事林廣記」のうち、私の知つてゐるものは左の通りである。

(1 宮内省圖書寮本。「纂圖增新群書類要事林廣記」と題し、甲集より癸集に至る十集二十卷十冊。目錄の後に木記があり、「至元庚辰良月鄭氏積誠堂刊」とある。この本はもと内閣文庫に在つたもので、後に圖書寮に移管されたものである。至元庚辰は世祖の至元にもあり(十七年)、又順帝の後至元にもある(六年)。そこで内閣文庫の目錄には之を「至元七年版」と記して順帝の至元庚辰に當てゝあつたが、[4] 圖書寮の和漢書目錄には「至元一七」として世祖の至元庚辰に擬してある。[5] これはいづれが正しいか私には分らない。新刊の「圖書寮漢籍善本書目」は忠實に木記を錄出しただけで何れとも斷じてないが、[6]「善本影譜」癸酉第七輯には後至元六年と明記してある。これには「至元譯語」はない。

(2) 内閣文庫藏元刊本。四集五十卷八册（續集のうち第五卷乃至第九卷缺本）。[7] これには「蒙古譯語」と題して同題の語彙がある。

(3) 靜嘉堂文庫本。書名に冠するに「纂圖增新群書類要」の八字を以てすること(1)に同じく、前・後・續・別・新・外の六集各上下二卷合せて十二卷六册。[8] 明永樂年間刊。新集の卷下に「蒙古譯語」の一篇がある。

(4) 内閣文庫藏明刊本。六集十二卷四册、明弘治九年刊。[9] (1)や(3)と同樣の冠稱が附いてゐると思はれるし、六集といふのは(3)と同樣に前・後・續・別・新・外の六かと思はれるが未だ原書を見るに及ばず、姑く書目の記す所に從つておく。これには「至元譯語」はないと云ふ。

(5) 東洋文庫藏明刊本。冠稱は「新編纂圖增類群書類要」とあり前・後・續・別・外の五集に分れ、前集の五卷たる外他は皆各六卷合せて二十九卷十册、もと長崎の葉德輝の藏本である。刊記はないが明代の事を記すを以て明刊本たることは疑ない。これにも譯語はない。

(6) 尊經閣文庫藏明刊本。この本未見、また實見者の談に據るもその詳細を聽くことが出來ないので略と(5)に近いものといふだけを掲ぐるに留める。

以上の外嘗てなほ元の泰定乙丑（二年）仲冬刊本が傳はつてゐたことは次の和刻本の項に就いて知ることが出來る。

和刻本はその冠稱が一定せず、標出の場所に依つて互に異つてゐる（後段參照）。内容の區分は(1)と同じく甲より癸に至る十集、各集二卷十册本で一般に流布するものは元祿十二年の刊本である。[10] 然し私はこの前に貞享元年に出た和刻本が今一種あつたのではないかと考へる。それは元祿本の序に徵してさう考へられるからである。今念の爲その全文を引くと、

陳元靚所編之事林廣記、自甲集至癸集若干卷、記事靡排語、摘要罔冗雜、引證詳而不加臆說、有功世敎者不少、余二十年前曾見此書之寫本、字畫漫漶而疑事最多矣、然無他本可考驗之、實爲可恨矣、頃或人加訓點、命之印工、而印工請序余、余就閱之、則圖也字也、舊時之訛者於是正焉、舊時之疑者於是辨焉、舊時之闕者於是補焉、不知從何處而得此善本乎、哉哉、此書有梓刻、可謂有助于學者、雖然奈何多彼視肉者乎、嗟乎於此書之行于世與不行于世、非余之所逆睹也、貞享元年六月、遯菴由的序。[11]

貞享元年の六月に「頃或人加訓點、命之印工、印工請序余」とあるからには、その年（又はその翌年頃には）本が出來てゐたと見てよからうと思ふ。果して然りとせば元祿十二年の刻本は先づその再版と考ふべきものであらう。然し何等かの事由で、折角貞享元年六月に序文を得て置き乍ら、出版者の側で元祿十二年迄そのまゝにしておいたといふことも無いとは考へられぬ。依つて私は今之をいづれとも斷定はしないが、貞享本の存在を假定して見るだけは全然理由のないことでもなからうと思ふ。（因にこの元祿本もその題簽の字體や紙質其他に徵して少くも先印後印の二種を區別することが出來る[12]）。

この和刻本が元の泰定二年の刊本の覆刻であることは原本の木記をそのまゝ刻出してゐることに依

つて之を明かにすることが出來る。卽ち甲集の目錄の後に「此書因印匠漏失版面、已致有誤君子、今再命工修補、外新增添六十餘面、以廣其傳、收書君子幸垂鑒焉、泰定乙丑〔二年〕仲冬增補」云々の刊記がある。楊守敬はこの和刻本の體裁に就いて「雖爲日人重翻、尙不失元刊之舊、可喜也」[13]と云つてゐる。

この和刻本(從つて泰定本)の體例・內容の一斑は前揭の貞享元年の序にも見えてゐるがなほ語つて詳かならざるものがある、詳細は圖書寮の和漢書目錄に擧げてあるが[14]、今大體を知る便に楊守敬の記るす所を左に轉載して見よう[15]。

新編羣書類要事林廣記九十四卷　日本元祿十二年刊本

元西穎〔陳〕元靚編。凡分十集、甲集十二卷、乙集四卷、丙集五卷、丁至壬各十卷、癸集十三卷。元靚箸有「歲時廣記」、「四庫總目提要」因有朱鑑一序定爲宋人。今此書乙集錄元初州郡、壬集錄至元雜令則元靚逮元代猶存也。其書體例彷彿「居家必用」而搜採較博、雖少遠大雅而實有便於日用。其中所采「蒙古篆百家姓」及地理禮儀、猶足攷元代之制度。時令一門與所撰「歲時廣記」不相複、彼爲攷古、此爲便俗故也。書首尾無序跋、唯甲集目錄後有木記、云……。此書箸錄罕載、雖爲日人重翻、尙不失元刊之舊、可喜也。

右に據ると楊氏は(1)元初の事物に關する記事の存在することを以て編者陳氏が當時なほ在世して自ら增添したものと考へてゐるが、强ち無稽なこととは思はれない。前にも述べた如く陸心源の如きこの說の反對者もあるが、陳氏の歿年が明瞭でなく、又宋本の舊を傳へた本が今存しない以上、元代關係の記事は全部後人の補入だと斷定することは出來まいと思ふ。(2)然し楊氏は「書首尾無序跋」と云つてゐるのは不正確であるが、偶〻氏の見た本に序が落ちてゐたのであらうと考へる。(3)原文には「木記」を「本記」と記してあるがこれは勿論誤刻であらうし、(4)又、書名の冠稱を「新編群書類要」としてゐるが、これは各卷の首に見えるものを採つたので、各卷の尾に記すものとは稱を異にし、又各卷の尾にあるものも卷數に依つて互に異ふといふやうな次第で實に雜駁を極めたものであるが、[10]一面俗書の面目をよゝ發揮したものである。

この和刻本(卽泰定本)には「至言譯語」がある。

四

以上に述べたことを一括し、私の知る限りの「事林廣記」の諸本に就いて略〻その前後を次じ、「至元譯語」の有無を表示すると次のやうになる。

1　元泰定乙丑刊本(姑く和刻本に據る)　「至元譯語」あり。

2　元至元甲辰刊本（圖書寮）　「至元譯語」なし。
3　元刊本（内閣文庫）　。あり。但し「蒙古譯語」と稱す。
4　明永樂九年刊本（靜嘉堂文庫）　あり。同じく「蒙古譯語」と稱す。
5　明弘治九年刊本（内閣文庫）　なし。
東洋文庫及び尊經閣文庫に藏する明刊本は前後を失し離いが共に「譯語」はない。

然しこれは極めて疏略なもので私の實見してゐない本もあるし、實見しても版本の鑑識に暗い私にはよく分らない點も多いし、又至元甲辰刊本を二番目へ置いたのも假に之を後至元六年と見てのことであり、旁〻これに就いては殆ど何も自信はない。すべて「假に」といふ程度である。然しこれで一方甲から癸の十集に分つ系統の本があつたと共に、他方前・後・續・別等の諸集に分つ本を派生したことや、その各〻が初めは「譯語」を載せてゐたが漸次之を載せないやうになつたこと、同じ「譯語」でも系統の差により或は「至元―」と云ひ、或は「蒙古―」と云ひ、互に名稱を異にした、といふやうなことが分りはしまいかと思はれる。

そこで少しく岐路に入るやうであるが、玆に一言しておき度いのはこの「蒙古譯語」といふものに「事林廣記」を離れて單刊別行のものがあつたのではないかといふ一事である。それは四庫の總目提要（卷四十三、經部小學類存目一）に「蒙古譯語」一卷を擧げ、永樂大典本と注し、その序文を鈔出して

あるが、内閣文庫藏元刊本「事林廣記」に載する「蒙古譯語」の序に比べると詳と簡との差はあるが全然同一の句があつて四庫の總目提要はそれを前後省略して要を摘んだものであることが分る。果して然らば「譯語」そのものは恐らく二者同じものであらうと考へられ、依つて姑く右の如き疑を存して見たのである。

さてこの「譯語」を泰定本と内閣文庫の元刊本とに就いて相對照すると殆ど相似たるものであるが間〻排列の順序・譯語・譯字等に出入がある。泰定本も餘りいゝ版ではなかつたと見え和刻本にもかなり譯字に誤記誤刻があるし、内閣本は版面が甚だしく磨滅してゐて殆ど讀み得ない部分が多い。依つて兩者を對校しても眞の校定をするといふことは甚だおぼつかない。假りに版のいゝ本を得たとしても、版の明快なことは必しも内容の正確を意味するものでなく、元來蒙古語に暗い支那人の手に成つた俗書のことであり、善本を求め、又廣く異版を集めて校合したところでその完全を期することは出來ない。寧ろ蒙古語の知識を以て誤記誤刻を正すに若かぬと思ふけれども、私にはその力がないのでこの方面からの校勘も出來かねる。そこで今は不完全を承知の上で先づ和刻の泰定本を本とし、之に内閣本・洪武本「華夷譯語」等を參照してその明かに間違と思はれる點は之を正し、いづれか目下の私には分らない分、乃至檢討に暇のない分は適宜篇末に校語を記しておくことゝした。極めて片々た

る語彙であり、四庫の總目提要に云ふ如く「似乎元代南人所記、然其書分類編輯簡略殊甚、對音尤似是而非、殊無足取」ものではあらうが、Mongolistik に志す人に多少の參考ともなれば何よりの幸である。因にこの「至元譯語」の至元が前至元、卽ち世祖の時のものであることは泰定二年の刊本に之を載することによつて斷じて疑ない。

至元譯語

至元譯語、猶江南事物綺談也、當今所尙眞貴乎此、分門析類附于綺談之後、以助時語云。

〔「江南綺談」といふのは當時江南地方に行はれたはやり言葉の如きものを集めたもので、この「譯語」の前に掲げてある。內閣本ではこの語彙の後に「綺談市語」と題して之を載せてゐる。次に內閣本ではこの語彙を前來錄記した通り「蒙古譯語」と題し、之に左の如き序を附してゐる〕。

記曰　五方之民言語不通、嗜慾不同、達其志通其欲、東方曰寄、南方曰象、西方狄鞮、北方曰譯、譯者謂辨其言語之異也。夫言語不相通必有譯者以辨白之、然後可以達其志通其欲、今將詳定譯語一卷刊列于左、好事者熟之則答問之間隨叩隨應、而無獻〔缺〕舌鯁喉之患矣。

〔右のうち圏點を附した語は四庫の總目提要に擧げた「蒙古譯語」の條にその「自序稱……」として引かれた文のうちに見える文句である〕。

天文門

1 天 腰念里
2 日 納剌
3 月 撒剌
4 新月 剌你撒剌
5 星 忽多
6 七星 朶端阿不干〔?〕
7 攢星 子吕哥兒
8 風 克
9 雲 奥速
10 雨 忽剌
11 雪 察速
12 雷 蒲邪都
13 電 念里拔論必
14 雹 因都魯

地理門

15 地 合剌兒
17 嶺 你奴泄
18 水 沃速
19 山 奥剌
19 泉 布剌
20 水泊 涼兒
21 海 苔來
22 江 也可木速
23 河 木連
24 澗 双剌
25 井 忽都
26 冰 忙宿
27 石頭 赤老
29 橋 去照吕哥
30 城 八剌介孫
31 村 信奥
33 野甸 怯歇兒
34 塔 來不兒哥

人事門

32 墻 八剌合孫
35 皇帝 罕
36 宰相 圍里必
37 大人 也可罕
38 官人 那延
39 娘子 下敦
40 佛 夕麼
41 秀才 納剌必圍赤
42 和尚 出魯忽兒

43 道人 唫眞
44 紵絲匠 禿魯哥兀蘭
45 甲匠 雹亞直
46 箭匠 續木直
47 弓匠 奴木直
48 絃匠 勒直
49 靴匠 倘禿速
50 氈匠 細々直哥
51 木匠 木都直
52 銀匠 蒙古
53 梳匠 三直
54 針匠 呪直
55 染匠 不都直
56 線匠 胡打速
57 烟脂匠 忒可速
58 粉匠 五花直
59 鐵匠 忒未直
60 皮匠 兀剌直
61 襴子匠 八剌撒荅直
62 達々 蒙古歹
63 回々 撒里荅歹
64 女直 主十歹
65 漢兒 托忽歹
66 蠻子 囊家歹
67 醫人 幹脫赤
68 帶弓箭人 火魯直
69 種田人 達里耶赤
70 厨子 納立直
71 孩兒 訥沃
72 女孩兒 伜勒
73 父 愛赤哥
74 耶々 阿不干
75 伯々 愛賓
76 叔々 阿不合
77 哥々 阿合
78 弟々 斗
79 姪兒 □
80 孫子 阿赤可
81 丈人 合敦阿赤可
82 叔伯兄弟 王也
83 舅々 納合丑
84 小舅 合敦斗
85 女婿 庫里干
86 男兒 阿列
87 婦女 阿減
88 母 阿可
89 娘々 阿母干
90 姐々 阿可赤
91 妹々 對
92 伯娘 阿珍
93 嬸々 阿珍
94 媳婦 愛兔
95 阿嫂 別里干
96 兒婦 蠻里

鞍馬門

97 馬 木里
98 騮馬 阿忽荅
99 移剌馬 阿只兒海
100 小馬 撒灰
101 蹴行 住剌
102 青馬 卜羅——
103 赤馬 折兒及——
104 黃馬 黃兀兒——
105 白馬 荅罕〔——〕
106 黑馬 合剌——
107 棗騮 法英兒——
108 花馬 阿剌——
109 灰馬 速魯——
110 沙白馬 迭里罕〔——〕
111 白點兒 只令兒
112 白鬃黑尾 若占剌
113 鋪馬 疋剌——
114 家生 呆都兒脫剌珊
115 梯 巳印〔即？〕丑——
116 野馬 胡闌——
117 生馬 奪速〔——〕
118 駒兒 兀奴還
119 二歲 荅罕
120 三歲 兀襄木里
121 鞍子 阿滿
122 橋子 木魯哥
123 韉 骨林馬
124 鐙 篤魯剌
125 鞍塔 掃胡兒
126 雁翅板 富荅孫
127 攀仔 庫木都魯哥
128 鐙折皮 秃也速兒
129 鞦 忽蠻六花
130 轡頭 匣荅兒
131 前鐶 垂可里
132 鞭子 覓乃
133 套杆 五忽魯合
134 汗替 秃黃木

車器門

135 弓 奴木
136 箭 速木
137 槍 只打
138 刀 云都
139 甲 忽耶
140 頭盔 蠻魯花
141 傍牌 匣剌罕
142 箭匣 剌忽兒

143 弓袋 忽林系
144 旗 禿
145 鑼 長
146 皷 忽魯哥
147 撲頭 奥道里可
148 樑 樑不西
149 起 合兒不合
150 筋 秀布
151 杓子 赤納合
152 笊籬 秀兒
153 盂子 錠刀
154 盞子 札忽剌速
155 瓶 年訛
156 盤 塔里八兒
157 棹子 十剌
158 栲栳 夫立班
159 升 說于深
160 斗 深
161 簸箕 折不哥
162 條箒 秀福兒
163 桶 撒魯花
164 梯 劫赤枯兒
165 枴 禿魯女
166 針 呪
167 梳 三
163 鏡 唾里
169 鑊 卓苦伏六
170 鎌 下禿和兒
171 交椅 撒折兒
172 床 易昔吉
173 蓆 只立速
174 帳子 忒立馬
175 傘 素姑兒
176 扇子 撒體兒
177 笛兒 札虎兒
178 三絃子 胡不兒
179 門子 匣剌膳
180 大撲頭 脫和甲
181 箭頭 忒木兒
182 箭口 腕奴
183 銚子 克不里
184 三尖銚子 過曹馬
185 翎毛 羽都
186 錯子 好剌
187 小刀子 氣都花
188 鍊鎚 居連必
189 弓絃 欽不喫

五　穀　門

190 米 札匣阿木
191 糯米 禿々兒還
192 麥 □亥
193 穀 匣剌阿木

194 床黍 蒙兀剌阿木
195 黑豆 匣剌不奴又
196 小豆 札下不奴又
197 菉豆 活々不奴又
198 大麥 牙立

飲食門

199 粥 不朶
200 飿 暗木宿
201 麵 兀立兒
202 熟麵 羅撒
203 饅頭 口涅
204 燒餅 兀都麻
205 肉 蜜匣
206 酒 荅剌速
207 油 都速
208 鹽 荅不速
209 醬 迷速
210 馬妳子 兀宿

身體門

211 頭 忒婁溫
212 孛攣 怯昆
213 眉 合你四
214 眼 尼敦
215 鼻 下八兒
216 口 阿滿
217 耳 赤斤
218 心 智寬兒
219 肝 乞立于
220 脾 佚留溫
221 肺 奧魯吉
222 膽 雪劣孫
223 腰子 不兒
224 肋支 合不兒合
225 琵琶骨 荅婁
226 牙 宿敦
227 手 阿兒
228 脚 闊兒
229 拳頭 訥篤兒彎
230 妳子 闊々
231 篤包 八好兒
232 骨頭 葉孫
233 瞎 速忽兒
234 禿 荅剌海
235 跛 朶忽剌
236 肥 塔剌昏
237 瘦 都魯懷

衣服門

238 番皮 苔胡
239 合袖 懷帖兒
240 袴兒 阿母都
241 裹肚 心干
242 襖子 迭兒
243 皮條 速兒
244 繫腰 不昔
245 腰線 不嗔
246 合鉢 或獨匣
247 帽兒 麻合剌
248 笠子 播魯哥
249 頭巾 正巾
250 故々 播庫脫
251 靴 兀禿速
252 氈襪 懷馬連
253 鞋 察魯
254 領兒 札合
255 氈 細々垓
256 段子 禿魯哥
257 絹 兀阿兒

器物門

258 布 翫眞
259 絲 忽苔孫
260 金襖 按彈迭兒
261 線 胡打速
262 車 忒里于
263 車軸 滕急里
264 車脚 庫里敦
265 鍋 朶還
266 釜 脫和
267 羅鍋 安和回
268 瓮 和都合
269 盆 賞撒兒
270 椀 愛也合
271 窵 臥里哥
272 槽 瓮我察
273 鍘刀 苔里吉
274 鑿子 禍祿
275 斤秤 登及宿
276 等子 滕禍兒
277 索子 迭剌
278 刷牙 莫兒出車
279 布袋 胡打
280 鎖 鎖魯合
281 碓 煖魯
282 磨 沸兒馬
283 船 肝惡夕
284 釘兒 合苔孫
285 錐兒 惜不哥

286 鑷子 亦聶薛
287 剪子 欠頭
288 熨斗 熨雜
289 火鎌 怯歹
290 鈴兒 黃說兒
291 鋸子 氣略
292 錛 五花里
293 鑽子 嘩林
294 杴 庫里車
295 鍬 怯思馬
296 皷兒 去照魯哥

文字門

297 文書 必赤
298 紙 怯里歹
299 墨 別可
300 筆 俗贍

301 硯 雨都
302 印 探合

珍寶門

303 玉 齒老溫
304 金 按彈
305 銀 蒙古
306 零銀 胡兒荅速
307 珠子 速不
308 象牙 詐安伯敦
309 釧兒 補花
310 鐶兒 捽哥
311 釵兒 獸女
312 銅 折四
313 鐵 忒木兒
314 錫 禿忽都罕
315 鑌鋼 播種羅福闌
316 碧鈿子 可齒老溫
317 烟脂 弋可速
318 粉 五花直

飛禽門

319 鵰 不魯昆
220 鷹 喝里柴〔?〕合
321 海東青 札罕東忽兒
322 鶻 塞眞古
323 兎鶻 移剌里兒
324 鴨鶻 納眞
325 豹子 撒里
326 籠奪 獨林及

327 孔雀 倒虎
328 花鴨子 禿剌
329 鷺鷥 胡七過嗔
330 鴛鴦 昂急兒
331 鵝 昏
332 野鷄 戶魯還
333 老鴟 舅里迓
334 老鴉 禿列老溫
335 班鳩 去重
336 鶴鶉 不多拿
337 雁 阿老安
338 鷄 忽魯花
339 草鷄 胡魯還
340 野鵲 撒也察侮
341 鶉鴿 庫古魯眞
342 燕子 過里葉車
343 雀兒 賓士胡兒

走獸門

344 龍 滕急赤
345 虎 八索
346 獅子 阿溫蘭
347 豹 吉里必被兒鬼
348 象 詐安
349 駝 探麥
350 牛 无哥兒
351 犢 土渾
352 驢 按只哥
353 騾 落索
354 羊 忽你
355 羔兒 忽魯孛
356 羯羝羊 薛里
357 羯羊 一兒哥
358 猪 唐兀四
359 母猪 麥怯眞
360 山猪 匣邦
361 狗 訥和
362 小狗兒 哥羅千
363 細狗 阿撒立
364 猫兒 蜜溫
365 貂鼠 不魯還

蟲魚門

366 龜 牙速度乃哥
367 魚 只海速
368 蟹 襄里搠哥
369 蛆 沒至

370 蝎 林
371 蜂 着哥
372 胡蝶 魯里百哥
373 蟻子 溫婁渴眞
374 蚊子 播勾拿

草木門

375 草 愛石速
376 青草 課乙愛百速
377 蘆子草 急剌速
378 花 斡々
379 芰 胡速兒
380 蒼耳 那赤急剌
381 田禾 荅里耶
382 麻 于斡立
383 松樹 赤葛剌孫
384 柳樹 闊車孫
385 柏樹 阿剌孫
386 槐樹 昏罕孫
387 竹子 戶魯孫
388 楸樹 古香孫
389 桃樹 福孫歹木敦
390 青楊 戶列孫
391 桑樹 密魯帖只册木敦
392 枯樹 貨忽買麼都
393 杏樹 傀列孫
394 樺樹 忽速木敦
395 榆樹 害列孫
396 樹根 玉瓜兒
397 葉兒 □赤

菜果門

398 葱 喪急剌
399 菜 愛伯孫
400 蘿蔔 篤魯馬
401 韮 和々
402 蒜 撒林撒
403 杏 傀列孫
404 梨 阿里馬
405 桃 福孫歹
406 蒲萄 玉浸
407 茨 奥溫
408 西茨 合兒不西
409 棗 赤匣

數目門

410 一 尔干
411 二 舌腰兒
412 三 兀魯班
413 四 都魯班
414 五 塔奔
415 六 只魯蠻
416 七 朶欒
417 八 奈蠻
418 九 曳孫
419 十 合魯班
420 二十 忽魯
421 三十 兀眞
422 四十 獨嗔
423 五十 荅賓
424 六十 只剌
425 七十 荅剌
426 八十 乃顏
427 九十 也速
428 一百 你干介
429 千 明安
430 萬 土滿
431 萬々 土々滿

時令門

432 年 荒
433 春 合不兒
434 夏 納和兒
435 秋 納母兒
436 冬 五溫乞
437 前年 兀里乃荒
438 去年 你荅你荒
439 今年 愛乃荒
440 明年 麻乃荒
441 後年 懷赤荒
442 外後年 只乃只荒
443 每年 荒不里
444 前月 兀里只撒剌
445 今月 阿〔?〕乃撒剌
446 後月 懷赤撒剌
447 正月 忽必撒剌
448 二月 胡打里玉宣眞撒々
449 三月 兀年玉宣眞——
450 四月 諲可々——
451 五月 胡打兒——
452 六月 納智兒——
453 七月 兀惱——
454 八月 補工——
455 九月 忽察荅里必——
456 十月 扶歆都兒——
457 十一月 亦剌古——
458 十二月 庫胡列——
459 前日 兀里歹子都兒

460 昨日 合赤土兀都兒
461 今日 阿乃于都兒
462 明日 磨海兀都兒
463 後日 懷赤兀都兒
464 外後日 布納只兀都兒
465 每日 兀都不离
466 多日 兀怜兀都兒
467 明也 柴也八
468 早辰 同木乃侮
469 日中 兀都兒篤里
470 晚也 溫荅
471 夜 粟你
472 昨夜 合赤千粟你
473 夜半 粟你篤里
474 一宿 你干瞎納
475 那時 訛綽兒
476 這時 愛乃愛昭折拿
477 往前 耶兒荅乞
478 如今 愛朶
479 幾時 怯里

方隅門

480 東 唾羅納
481 西 豁羅納
482 南 愛木揑
483 北 兀木揑
484 上 送 剌
485 下 獸 落
486 前 兀力荅
487 後 懷 剌
488 這壁 印剌々
489 那壁 只剌々
490 這裏 按荅
491 新舊 若匿号嗔
492 裏頭 度札剌
493 外面 下荅剌
494 多少 臥郎逐完
495 將來 黯赤列
496 不中 兀列播兒忽
497 休說 不蔚列
498 不當 匿沒
499 逃走了 活魯活八
500 把者 四□利竹

君官門

501 大王□
502 太子□
503 駙馬 庫魯干
504 公主 別吉

505 斷事官 札魯花赤
506 宣差 達魯花赤
507 使臣 宴赤
508 縣官 活魯那延
509 萬戶 獨滿那延
510 千戶 明安那延
511 百戶 瓜赤那延
512 五十戶 塔賓那延
513 牌子頭 号魯那延
514 民戶 益千戶
515 通事 乞里覓赤
516 買賣人 或且書赤
517 伴當 訥哥兒
518 出軍人 巢剌赤
519 樂人 那睿赤
520 把門人 匣兒匣赤
521 牧馬人 木里赤
522 放牛人 或箇赤
523 放羊人 活匿赤
524 水手 速赤
525 醫獸 厭直
526 帶弓箭人貨魯直
527 媒人 篤剌赤
528 師婆 趴

顏色門

529 顏色 愛剌忽
530 青 可々
531 大紅 迷亦忽剌
532 紅 忽剌
533 赤黃 胡蒼若
534 渾黃 剌識昔剌
535 黃 昔剌
536 白 察罕
537 黑 匣剌
538 紫 只亨
539 藍 怒窩
540 茶褐 卜羅
541 墨綠□窩

校記

一、分門に就いて。君官門は內閣本（以下閣本と略稱す）に於ては人事門と鞍馬門との間にある。車器門はもと器門とあつたのを閣本に依つて車字を補つた。他は差異なし。

二、上掲の語彙中、□を以て示した箇所は必しも缺字又は蟲損を意味しない。如何なる字か解し得ない異様の文字を姑くこの符を以て示したものもある。

三、各語に就いて。

1 から 34 まで（但し 4、6、7、20、27、33 を除く）及び 40 にはもと漢語の下に各々「日」の一字を挿入してあるが今閣本に從ひ全部之を省いた。

2、3、12 等の蒙古語の末に意味不明の——なる符があるがそれらも省いた。

18 閣本水を火に作る。勿論誤刻である。

19 もと夫人に作る。閣本により大人に改む。20 水泊を潦兒と云ふは漢語ならん。

52 「蒙古」の下に「直」を脱せるか。

64 閣本女眞に作る。65 閣本托を打に作る。

68 もと大魯直に作る。大は火の譌。閣本貨魯赤に作る。この語 526 に重出す。その條の譯語貨魯直に作る。

69 閣本種を作に作る。この次に閣本にては 95 96 の二語を置き、95 を此門の最後に重出す。

70 納を閣本訥に作る。この類以下一々注せず。

80 可、閣本口に作る。81 丈人、もと文人とあり、閣本に據り改訂。

92 閣本伯娘を伯叔母に作る。93 閣本になし。95 別、閣本は一は那に作り一は別に作る。別を正しとすべし。94 閣本獃を別に作る。

97 もと馬名に作る。閣本に依り名を省く。木里の里もといづれも孚に作る。誤なり。99 閣本、移を曳に作る。

109 と 110 と閣本倒置。112 閣本になし。115 卽〔?〕字閣本に依り補ふ。

120 木、もと本に作る。閣本木に作るは正し。124 對譯を閣本木里刺に作る。
129 六、閣本八に作る。153 閣本孟子に作る。155 156 閣本倒置。
169 伏の次にもと六なし。閣本に依り補ふ、184 閣本になし。187 閣本に子字なし。
223 不、閣本は卜。224 閣本合不合兒に作る。240 閣本に兒字なし。
260 もと兒字なし。今閣本に從ふ。301 もと肅都に作る。今閣本に依る。
322 閣本、古を舌に作る。346 阿溫蘭、溫字は何か誤ならん。350 无、閣本兀に作る。
351 土字もと七に作り、閣本士に作る。共に誤にして當に土に作るべし。
357 もと一字なし。閣本に依り補。397 □、閣本は南に作る。
406 玉、もと王に作る。410 もと亦干に作り、閣本は亦下に作る。共に尒干の譌なり。427 速、もと連に作る。誤なり。
436 閣本五を玉に作る。誤なり。437 乃、閣本及に作るは非なるべし。453 閣本懶を赤に作る。
454 閣本、工を下に作る。461 もと于字なくーに作る。閣本干に作るも于又は兀なるべし。
465 閣本は兀魯兒に作る。468 閣本、木を禾に作る。
469 もと兒字なし。今閣本に從ふ。470 閣本、溫を也に作る。
472 合赤の二字、閣木倒置す。499 活魯活八を閣本たゞ舌魯に作る。
501 502 の漢語の下の口は同の意にして漢語のまゝなるを示すものならん。508 閣本、活魯を也里に作る。
511 瓜字、閣本明かならざるも武〔?〕に作る。519 の次に閣本は 527 を置く。
523 は閣本にては 525 の次に置かる。526 は閣本にては 528 の次、本門の最後にあり。

537 刺、もと神に作る。閣本に從ひ當に刺に作るべし。538 只、もと口に作る。亦閣本の如く只に作るべし。

〔註〕(1)服部宇之吉博士編「佚存書目」一〇一頁。(此書が神田、長澤兩學士の手に成ることは服部博士の序文に明かである)。

(2)陸心源は毛晉の舊藏に係る明永樂刊本を一部有してゐたが(「皕宋樓藏書志」卷六十)これは今靜嘉堂文庫の有に歸し、葉德輝も明刊本一部を藏してゐたが亦今東洋文庫の架中に收められてゐる。(「汲古閣珍藏秘本書目」黃氏士禮居刊本、十七葉裏に「事林廣記十二本、內府硃腔抄本」を擧げてゐるが今その所在を知らぬ)。

(3)「皕宋樓藏書志」卷六十參照。本文に記した通りの語を用ゐてあるわけではないが意は上に記した通りと思はれる。

(4)「內閣文庫圖書假名目錄」卷二、六百三十四頁。

(5)「帝室和漢圖書目錄」一三六頁。

(6)卷三、四〇頁。(因に云ふ、こゝには書名の冠稱「纂圖增新……」の新を進と記してあるが誤記であらう)。

(7)「內閣文庫假名目錄」卷二、六百三十四頁。

(8)「靜嘉堂祕籍志」卷九、十三葉裏以下。永樂戊戌刊といふことは「儀顧堂續跋」の所述を抄記したもので、「祕籍志」としては「明永樂刊本」と記してあるに止る。「靜嘉堂文庫漢籍分類目錄」も同樣である(五六一頁)。

(9)「內閣文庫假名目錄」卷二、六百三十五頁。

(10)元祿十二〔年〕姑洗日〔三月〕〔京都〕京極通五條上ル町中野五郎左衞門、同松原上ル町今井七郎兵衞板行とある。

(11)遯菴は字都宮的の號で由的はその字である。彼は周防岩國吉川氏の儒臣で、寬永十年周防に生れ、寶永六年五月に年七十七で歿した。

(12)例へば甲本の題簽に事とせるを乙本のそれには吏に作つた如きもの。

(13)「日本訪書志」卷十一、四十一葉裏。
(14)「帝室和漢書目錄」一三五—六頁。
(15)(13)に示せる書、四十一葉表—裏。
(16)全編を甲から癸までの十集に分ちながら、版心には甲を卷一とし以下順に癸を卷十としてある。各卷とも首には書名に「新編群書類要」と冠してあるが、卷尾に於ては一定せず、或は「重編分門纂圖」とし、「新編分門」とし「新編分門纂圖」とし、甲集の目錄には「新編纂圖」として統一がない。

〔附記〕再三記した如く、本稿は本來私の如きものゝ筆にすべきものでなく、且つ靜嘉堂本をも十分に檢討對校する餘裕なくして草した甚だしく不滿足なものであることは幾重にも讀者の諒恕を請ひ度い。蒙文「元朝祕史」の單語や明代の諸種の漢蒙語彙(幾つかの「華夷譯語」・「登壇必究」や「武備志」・「盧龍塞略」などに見ゆる同種のもの)に載つてゐるそれらとの比較は切に專門學者の勞を煩はし度いと思ふ。